

第十三章 デモの渦の中から

　　齡五十の男盛りをむかえる大平は、いまや、表は文教委員長、裏では池田の第一の腹心という地位を固め、次第にマスコミにも、あるいは党内の他派にも知られる存在となつて行つた。

　　池田の再入閣は、『筋の通らない入閣』として、マスコミ等では不評判であつたが、大平は池田のイメージアップのために蔭での努力を続けた。たとえば池田と親しいある新聞記者は、池田入閣に腹を立て、三カ月ほど足を遠ざけていたところ、ある日大平から「時間あいていないか。今日オヤジ（池田）はいるよ」と電話がかかつてきた。その声に誘われて記者は池田邸に赴き、以前の関係が復活した、という。

　　ちよつどその頃、岸内閣の最重要課題である安保改定問題が、デモの怒号と暴力沙汰の中で最悪の事態にむかつて突き進んでいた。

　　昭和二十六年、対日講和条約の調印と同時に締結された日米安保条約は片務的かつ不平等な性格が強く、その改定は、吉田内閣以降の歴代内閣の懸案であつた。そして三十二年六月岸首相が訪米し、アイゼンハワー米大統領と会談してから、次第にその氣運が高まつていたのである。

　　ところが、日本がアメリカと対等になり、強国への道を歩むのを恐れた中ソ両国はこれに反対の意志を表明し、野党陣

嘗は、これを機に、新安保条約は日米相互防衛方式を定着化させるものだとして、いっせいに反対に立ち上がった。与党内にも、旧吉田派、石井派などの時期尚早論、三木・松村派などの沖縄除外論が出て、与野党の論議が紛糾した上に、警職法騒動の余波もあって、安保改定交渉は一時中断のやむなきにいたった。

しかし、翌三十三年に入るや、二月、藤山外相は、政府、与党に藤山試案を提出、四月八日には日米安保改定要綱が決定され、マッカーサー米大使との交渉が再開されることになった。

昭和三十四年の参議院選挙後の臨時国会では、野党は安保改定に質問を集中し、この問題は次第に世の中の関心を引くようになって行く。ただ、この安保改定問題は、四年前に統一していた社会党に再び分裂をもたらすことにもなった。安保改定を是とした西尾末広が、九月十二日の社会党大会で党規律違反として処分され、西尾系と河上系の一部が離党して民主社会党が結成されたのである。(翌三十五年一月二十四日)

安保条約の本格的論議は、昭和三十五年二月に新安保条約調印のため渡米した全権団の帰国後、第三十四通常国会が再開してから始まった。

本来ならば、わが国の立場を有利にし、日米関係を対等の方向に進めるはずの新条約が、いわゆる革新陣営から改悪と受けとられただけでなく、最後には三十万人に及ぶ大デモに発展して、岸内閣の生命を断つにいたったことについては、国内的、国際的にさまざまな要因があげられるであろう。いまそのすべてをここで吟味する余裕はないが、その最大の原因は、戦争、敗戦、占領の衝撃によって受けた複雑な精神的^ト外傷^マから、当時国民の多くがまだ回復していなかったこと、こつした戦後日本の国民感情の微妙な動きに対し、政府の安保問題を処理する政治姿勢に十分な配慮と慎重さが欠けていたことにあつたと言えよう。

当時の岸内閣は、世論調査等により安保改定反対を唱えるものがわずかしかなかったことをもって、おそらく世論が安保改定に反対することはないと見たのであろう。そのため国民に問題を周知させる努力を怠り、また野党の抵抗を強行突破し

ようとした態度が、本来安保改定賛成にまわるべき多くの人々や、中間的な意見を持つ人々を、安保騒ぎの混乱の中で、反対の側に追いやる結果となったと考えられる。

与党内に新条約について異論があったことも、これに拍車をかけた。しかも反主流派の中には、条約批准と岸総裁三選阻止をからませるものも出てくる始末で、そのために政府側は党内調整にもつぱら力を費やし、世論に訴える力が減殺されたことは否定できない。

その一方、院内に多数を持たぬ野党は、院外活動に全力を傾け、昭和三十五年（一九六〇年）三月二十三日の社会党臨時党大会で委員長に就任した浅沼稻次郎は安保反対デモの先頭に立って奮闘した。四月に入るとデモはますます激化し、二十六日には全学連の学生が機動隊と激突し、流血の惨事をひきおこした。

野党側の抵抗により、新安保条約の審議は遅々として進まず、また与党内反主流派の三木・松村・石橋・河野派は、会期を延長して慎重審議すべきであり、警官導入による強行採決は避けるべきだと主張した。

日米修好百年祭を記念するためのアイゼンハワー米大統領の訪日は、六月十九日と決まった。政府は、それまでには何とかも条約批准を終わらせておきたいと考え、五月十九日、衆議院安保特別委員会で強行採決を行った。これに怒って本会議場を占拠した社会党の議員と秘書団を、衆議院議長清瀬一郎は警察官五百人を動員して排除、本会議を開催して、野党欠席のまま会期五十日の延長を議決、ついで二十日未明、新安保条約を強行採決してしまった。与党反主流派二十六名も、野党に同調して欠席した。全学連は装甲車を乗り越えて首相官邸にまで乱入した。

これが、反米、反安保闘争から、岸内閣打倒、アイク訪日反対闘争への曲り角となった。野党は、マスコミの支援のもとに会期延長、単独採決無効を宣言、政争の舞台は完全に院外に移った。争点が「安保」から「民主主義」に移行するとともに、デモへの参加者は飛躍的に増大し、国会周辺は連日デモ隊によって埋められ、騒然とした空気が都心を包んだ。

池田は、岸首相の政治手法には批判的だったが、新安保条約は日本外交の根幹をなすという判断から、新安保が成立するまでの一カ月間、窮地に陥った岸内閣を支持しつづけた。

六月十二日には、アイゼンハワー米大統領が極東旅行に出発し、同大統領の訪日受け入れが可能かどうか、問題はこの一点にかかっていた。

息づまる緊張の中で、六月十五日夕、国会構内に突入した全学連が警官隊と衝突している最中に、一人の女子学生が死亡した。デモ隊は激昂し、もはや社会党や共産党の統制のものにはなかった。暴動的雰囲気醸成され、あちこちで警察の車が炎をあげた。

事態の処理をめぐって閣議は紛糾したが、翌日午後、岸首相はついに米大統領の訪日延期要請を提案、閣僚二名の反対をのぞいて、それも止むなしとの結論になった。

この時点ですでに、岸首相は退陣を決意していた。

新安保条約は六月十九日に自然成立し、二十三日外務省で批准書交換が行われて、発効した。その朝、岸は政府・与党会議で辞意を表明した。

大平は、昭和四十一年になって、この『安保騒動』を次のように総括している。

「この騒動は、そのタイトルが示すような日米安保条約改正の是非をめぐる論議からいつの間にか大きく逸脱して、保守対革新、さらには治者对被治者の在り方を問う一大政治運動の性格に変わってきた。長期にわたる戦争と敗戦のもたらした物質的困窮からようやく立ち直ってきた日本国民は、自らの精神にある種の渴きと空虚さを覚えてきた。そして占領政治とその衣鉢を受け継いだ保守政治に、抵抗意識とも倦怠感とも判じ難い反発と不満を感じるようになってきた。この渴ききつた空気を、左翼勢力が黙って見逃すはずはなかった。たまたま岸政権が、安保条約の改正——それはたしかに安保体制下における日本の立場にある程度の自主性を盛り込み、国民の精神的空虚を少しでも埋めようと目論んだ善意のものであったのだが——を企図するに及んで、彼等は巧みに安保条約の改正をその改悪にすりかえ、さらには、これを国民の渴ききつた精神的渴望感に対する点火剤に転用して国民を安保体制打破へ、さらには保守政権の打倒へ駆り立てたのである。

しかもそれは、中ソ両国の対日政策の執拗な展開と相呼応して大規模に展開された。安保騒動の舞台裏には、そういうカラクリが、半ば公然と仕組まれていたのである。ただ、なぜ多くの国民が、そのカラクリ性を意識しているものまでが動員されたかということ、さらには今日もなお同じ文脈に属する運動に動員されつつあるかという政治史的課題が、われわれの吟味すべき課題として残っておりるのである。」(『春風秋雨』)

さて、岸首相が引退を声明した以上、後継総裁の選挙にとりかからなければならぬ。

すでに記したように大平は、池田が石橋蔵相の下で主税局長から次官に起用されたとき、辞退するように進言した。また、代議士一年生の池田が蔵相に抜擢されようとしたときにもそれに反対した。だが、池田は大平の進言を容れず、それぞれ次官、蔵相へ進んだ。

「誰でも『三振』はいやなものであり、しかも、『連続三振』は私の好むところではなかった。池田さんに残された政治家としての最後のステップは、総理大臣の座であった。昭和三十五年の夏、池田さんが自民党の総裁選挙に出馬された時は、私は最早、三たびそれを思い止まるよう自重を勧めるようなことはしなかった。むしろ『三振』ではなく、『三進』の成功を祈って、自らもいささか努力した積りである。」(『私の履歴書』)

派内には慎重論もないことはなかったが、池田の出馬意志は固く、池田派はあげて、池田総裁擁立に立ちあがった。

ところが、党幹部の間で、総裁選出の方式がなかなか決まらなかった。むしろ党規約には、党大会における総裁公選規定があるのだが、岸、佐藤の主流派は、安保改定問題の処理について岸政治に批判的だった三木、河野派を締めだした上、岸、佐藤、池田、大野、石井の五派連合政権をつくろうと画策し、公選は後にシロリが残るからとして話し合いを主張した。話し合いの推進者は岸派の川島幹事長だったが、池田、大野、石井の三候補はいずれも公選論に固執して、譲る色を見せない。そして、大野、石井の両派は「池田支持」を示唆した吉田元首相の言動や池田派の高姿勢に反発し、連合戦線を結成することになった。

この間、岸首相は特定候補を推さず静観の態度をとっていたが、七月一日、益谷国務相、船田政調会長と会い、早急に党内調整を終わるよう要請した。

自民党首脳は八者会談（大野、益谷、川島、松野、重宗、佐藤、池田、石井）を開き、その結果、臨時党大会を七月十三日に開くが、この大会では総裁を推挙する形をとるよう話し合いを進めることを申し合わせた。

池田派は基本的には公選論だったが、派内には公選の経験者が誰もいない。困った大平は、前回（昭和三十一年十二月）の総裁公選時、佐藤派の参謀として岸陣営の一角を担った田中角栄に相談をもちかけた。田中は、池田の遠縁にも当り、池田のもとにしばしば出入りしていたが、その関係からこの頃には大平と親しいかわりを持つようになっていたのである。

「……」三日のうちに、田中君から数ページに及ぶメモが届けられた。そこには総裁選挙に関する政策の大綱はもとより、具体的な運動のやり方や予算までが青インクで、重要なところはわざわざ赤インクでしたためてあった。私は田中君の親切を多とした。

早速そのメモを携えて、私は池田さんを訪ねて説明したところ、池田さんは極めて不機嫌で、ただ一言「ピター文、金を使ふようなことは相ならん」といわれるのであった。私は「わかりました。どこまでご期待に沿えるかわかりませんが、できるだけご意向をくんでやってみます。ただこの選挙は、われわれ同志の責任でやらして頂きたいと思えます。できましたら貴方は、一切介入されないようにして頂きたい」と申し上げ、事実またその通り実行したのである。「（私の履歴書）」

ところで岸首相は依然として特定候補の支持を表明せず、党首脳の間にも出席しなかった。結局、話し合いによる調整は困難との見通しが濃くなり、各派はいっせいに公選の姿勢を固めた。八日、川島幹事長も岸首相に対し「公選のほかなし」と報告し、その諒承を得た。

九日、池田、大野、石井、松村が、十日、藤山があいついで立候補の意志を表明した。佐藤蔵相は池田支持にふみきり、岸派は自由投票でのぞむことになった。

『朝日新聞』（昭和三十五年七月十日付）によれば、池田の立候補声明は次のとおりである。

「わたくしは、五月中旬からの混乱の事態が、わが国の社会秩序をゆるがし、日本の国際的信用をそこなつたことに深い反省をしている。このような事態を一日も早く是正し、自由で豊かな日本を築き上げることが、われわれに課せられた急務であると考ええる。

わたくしは自主的発展的な日本建設のためには次の六項目の実施をはからなければならないと信ずる。

(一) 議会政治の再建「そこなわれた議会政治と、政治家に対する信用を回復し、なによりも反対党に対する寛容と忍耐の精神が必要であることを深く銘記する。

(二) 社会秩序の確立「治安の根底は人の心にあると信ずる。人心の安定と相互の信頼感が社会秩序の根源であり国民に信頼される政治を行うことが先決要件だと思ふ。

(三) 国民生活の向上と社会保障の拡充「まず、国民総生産を十年後に二倍以上にすることを政策の目標として掲げる。あらゆる階層の所得水準を高め、とくに農業と商工業との間、あるいは大企業と小企業の間、ならびに各地域の間にある所得の開きを、国民経済の成長の過程において解消し、国民の生活水準とその内容を、先進諸国に劣らない程度にまで向上させるために、精力的に建設的な措置を講じたい。他面、社会保障を拡充して、不幸不遇の人々にも、社会繁栄の喜びを分けるよう努力する。

(四) 文教の刷新「私は施策の重点を文教に置き、思い切つた財政的裏づけのもとにその刷新と充実をはかり、とくに科学技術の画期的振興と、これからの日本を背負う青少年を健全に育てることに力を入れたいと思ふ。

(五) 平和で自由な協力的国際関係の樹立「真の国際平和は、相互の理解と信頼と協力の上でのみ成立する。このゆえにわが国は自由陣営からは信頼され共産陣営からは畏敬されることによって、はじめて平和と自由な国際協力の基盤を保つこ

とができるが、このような目的を持つ日米安全保障条約が、二の隣邦から疑いの目をもって見られるばかりでなく、国内でもこれについての疑惑と反対のあることをきわめて遺憾に思つ。

(六) 党風の刷新「まず党内に民主主義を確立し、人事の適材適所主義に徹底することによって、さわやかな新風をわが自民党に吹きこむことを当面の使命と考えている」。

文体から見ても構成から見ても、これはまぎれもなく大平が起草した文章である。

同じ紙面には他の四候補の声明も掲載されているが、池田のように政策を正面にかかげた文章はどこにもなかった。

ここで注目すべきは、反対党に対する「寛容と忍耐」が記されていることである。この言葉の出所については、これまでにいろいろの見解が述べられてきたが、大平が、昭和二十七年の初当選当時、「寛容」という言葉に触れていることを知るものは少ない。同年六月四日付の『朝日新聞』香川版によると、大平は記者の質問にこたえて、「狭い国に住んで行く以上「寛容の精神」が必要ですよ。「寛容の精神」が……」と語つたと記されている。おそらく大平は、この頃から、「寛容」を一つの政治姿勢と考へつづけていたのである。

それはともかく、池田派は公選の日の五日前から赤坂のプリンスホテルに選挙事務所をかまえ、手分けして、支持者の獲得に奔走した。

大平は書いている。

「……新聞記者等による取材活動は、昼夜の別なく展開され、事実と虚報は複雑に交錯して、神経戦はいよいよ激しくなつてきた。しかし、各議員や代議員が誰を支持するかは、大部分は予め見当がついており、工作の対象になるものは比較的少数であった。そしてその目標はどの陣営においても不思議と一致しておるようだった。いわばこの少数人数のために天下が大騒ぎしなければならないことになるのであるが、「少数」をどう納得させるかということが、元来、民主主義の支払うべき代償であるのだからやむを得ないことであつた。」(『春風秋雨』)

池田派の台所をあくまで、実質上、事務総長的な役割を負った大平の基本的な作戦は、まず、大磯の吉田のバックアップによって佐藤派の支持をとりつけ、それをテコに岸派を動かし、一方、藤山、石井、三木派などの中で池田との提携を望む票を吸収しようというものであった。

佐藤派内には、『同僚の池田を推すよりも、石井を支持した方が佐藤政権への近道だ』という意見も多く、大平の佐藤派工作の苦心もそのへんにあつたが、佐藤派の参謀田中角栄の協力を得て、佐藤の池田支持をとりつけることができた。もっとも、この裏には、『池田が二期やれば、あとは佐藤に渡す』という暗黙の諒解があつたと言われた。いずれにしても、佐藤派は一本になつて池田支持に立ち、佐藤は赤坂プリンスホテルの池田の事務所へ乗りこんできた。

池田強しと見た大野、石井両派は、大会前日の十二日に見込み票をつき合わせ、情勢分析をした。その結果、大野が決選投票に残つた場合でも、石井支持票の多くは大野に流れないと判断し、あくまで池田政権を阻止するためには、党人派の少ない石井にしばるほかないという結論に達して、大野は立候補を辞退することにした。この打合せのため、大野、石井、松村三候補と、川島幹事長、河野一郎、三木武夫、石橋湛山らは十三日午後丸の内ホテルで会合した。「はしなくも選挙戦は『官僚派』と『党人派』の争いともいふべき様相をおびてきた。」(『私の履歴書』)

こうした動きのために、産経ホールでの党大会に党人派は出席せず、午前十時の開催予定が午後二時五十二分になつてようやく開かれ、議長を選んだだけで散会した。

最後まで態度を明らかにしなかつた岸派は、この新事態を協議した結果、これが河野、三木両派の策謀にあるものと見て、各派に分散していた同派議員を総引揚げし、池田支持に回ることにした。岸派の川島系は大野支持だったが、大野が降りた以上、石井には義理がないとして、これも池田支持に転じた。また派の存在を明らかにするため出馬する藤山も、決選投票では池田を支持することになった。

十三日、党大会が流れた後も、各派の活動はつづいた。

「……私は産経ホールの一室で池田、佐藤の両氏に呼び出され、これから直ちに三木武夫君に会い、当方に同調するよう要請してこい」という命令を受けた。早速、三木さんの所在を確かめたところ、丸の内ホテルの七階にいたことが判った。そこで私は直ちに丸の内ホテルに行ってみると、全館はむんむんするようなこった返しの状況であった。あえぎながら階段を上って七階にたどりついたところ、部屋の前には塚田十一郎、灘尾弘吉、稲葉修等の各氏がいて、今この部屋では、石井、大野両氏を中心に河野、三木、松村等の各氏が集まり、重要な会議が開かれている。どうしても三木さんに会わずわけにはいかない」といって断られた。それにあたりは、最早、石井内閣ができたかのような気配で、「おめでとう」という挨拶までが、すでに交換されている有様であった。私はふと、その二、三日前にNHKで対談したとき、塚田さんが「大平君、戦いは最後の五分間だよ」といわれた言葉を思い出していた。

頼みの三木氏に会うことができなかった私は、埃だらけの非常階段を降りて、産経ホールに引き揚げた。党大会の会場には、最早人影はなかった。〔『私の履歴書』〕

産経ホールに帰った大平は、タバコの吸いがらなどが残っていないかと会場を一巡して外へ出たところ、ホールへつづく大きなゆるやかな階段を飄々と歩いている椎名悦三郎に出会った。

大平があいさつすると、椎名は言った。

「オレにはどうもわからんことが起こっているな」

「わからんとは……」

「党人派連合と言っけれど、北京と台湾が一緒になっているのはどういふことだ」

大平は事務所に引き揚げる車の中で、この椎名の言葉の意味するものをじっと考えた。おそらく椎名は、松村や三木らの親北京派と石井や大野の親台湾派が合流したが、一皮むけば、政策的にも矛盾があり、まだじっくり行っていないということを示唆したのであろう。そこで大平は、時をかければ党人派が固まると見て、速やかに大会を強行しなければならぬと感じた。

「(私は)事務所に戻って、同志の諸君に『面倒だが、これまで接触をもった方々に、もう一度肩たたきに行ってもらいたい。終わったら、その旨知らせてもらいたい』とお願ひした。それが終了したのは、夜に入ってからのことであった。最後に私は、赤坂の料亭で食事をしていた菅家喜六大会運営委員長を訪ねて、明十四日には、必ず党大会を開いてくれるよう依頼した。菅家氏の快諾を得てホテルに帰った私は、その夜、事務所のソファの上で毛布に包まれてまどろんだ。」
 (『私の履歴書』)

当時池田の秘書だった伊藤昌哉は、この夜の池田邸の様子をこう描写している。

「公選が一日延びた夜、信濃町に帰っていると、大平がきた。その大平に、安岡正篤氏から電話がかかってきた。

『池田さんは、あす総裁になるだろうが、けっして高びしやな態度にではいけない。自分の責任でこういう事態をまねいたと、できるだけ謙虚な態度でのぞまれるのがいいと思う』

大平は、『大臣、やっぱりあすは、低い姿勢、でやってください』と言った。池田は『よしわかった』と言つ。われわれはもう勝った気持ちだった。(伊藤著『池田勇人その生と死』)

党大会は十四日午前十時、日比谷公会堂で開かれ、総裁公選が実施された。結果は次のとおりである。

第一回投票

池田 勇人 二四六票

石井光次郎 一九六票

藤山愛一郎 四九票

決選投票

池田勇人 三〇二票

石井光次郎 一九四票

こうして池田新総裁が誕生した。

再び大平の回想に戻る。

「七月十四日の夕刻、総裁の地位についた池田さんに、私は『とうとう貴方も総裁になられましたね』と申し上げた。池田さんは感慨深そうに『うん』と答えられてしばらく沈黙が続いた。次いで私は、『貴方は東京に出てこられた当時、何時の日か今日の地位につけるものと思っていましたか』と重ねて聞いてみた。もちろん池田さんの答えは『否』であった。さらに私は『本来、期待していなかった地位につかれたとすれば、現在与えられた地位におられることが如何に短くとも、文句のいいようもないわけですね。極端に言えば、朝に組閣して、夕べに倒れても已むを得ないのではないですか。また政権担当を何時まで許されるかは、国民が決めることであって、貴方がお決めになることではないと思います。』
ついではこの際、一つお約束を願いたいことがあります。それは、貴方ならびに貴方の周辺の者の間においては、長期政権という言葉葉を絶対の禁句にしてくださいなのですが』と詰め寄ったところ、池田さんは素直に『その通りだ』と、応えられた。

次に私は『総理総裁たる方は、徹底的に庶民になりきっていただかなければならない。庶民と隔絶した意識と生活の中からは、庶民の納得のゆく政治ないしは庶民の協力が得られる政策は生れてこないと思います。飽食暖衣、自らは安逸を貪りつつ、国民に向って耐乏や節約を求め、国民の努力を要求しても、それは空念仏になることでありましょう。』
ついでこの際、さらにお約束願わなければならないことは、総理在任中はまず第一にゴルフを慎まれること、第二にお茶屋への出入りを自粛されることであると思いますが、お約束していただけますでしょうか』と進言した。これに対しても池田さんは素直に『そうしよう』と答えてくれた。(『春風秋雨』)

付言すると、大平はこの時、『ただし、私は総理総裁ではありませんから、ゴルフにも参ります。お茶屋にも出入りいたします』と言ったという。

十五日、池田は満枝夫人だけを連れて、箱根仙石原に落成して間もない箱根観光ホテルに赴いた。

翌朝、大平、伊藤、登坂の三人がホテルへ登ってきた。大平は内閣官房長官、伊藤は首席秘書官、そして登坂は私設政治秘書と、その役割は自ずと決まっていた。

十七日には池田は山を降りた。

大平の車には三人の記者が同乗した。NHKの島桂次、毎日新聞の久保糾、そして時事通信の野原寛である。島の回想によれば、

「車が第二京浜国道にさしかかると、うたた寝をしていたおとうちゃんは、ふと目をさまし、調子はすれのタミ声で当時流行していた歌謡曲『夜霧の第二国道』を口ずさんでいた。『鼻歌まじりで内閣ができるのですか』と皮肉をいうと、おとうちゃんはキツとした表情で、『いま、私は池田さんと背負いきれない荷物を負って、死ぬ思いでいる。私も池田さんも凡庸な政治家かも知れないが、ただ政治を行う心構えだけはできている』という。それは何ですかとたたみかけると、おとうちゃんは『寛容と忍耐だ』と答えた。」(『回想録』追想編)

久保によれば、

「大平さんは、車の中で突然、『すばらしい恋を試してみたいもんだな』と言いだした。そして彼が学生時代に覚えた、エドワード八世がシン普森夫人に恋をして王位を去る時の言葉を暗誦するんだ。I can not endure the heavy duty as a king without a woman I love.」そして「サンキユウ」とこれでおしまいになる。よほど気分が昂揚していたんだろう。」

箱根の山の人事構想で一番問題になったのは、幹事長の人選である。池田は箱根に行く前に、大磯に寄って吉田元首相に総裁就任のあいさつをし、この時、吉田から内務官僚出身の山崎巖を幹事長に推薦されたものらしい。

箱根から帰ると案の定、山崎幹事長に池田派内から猛烈な反対が出ていた。池田が電話で話しても、どうしてもおさまらない。やむなく、大御所の益谷秀次を幹事長に据え、その補佐として筆頭副幹事長に大橋武夫を置くことにした。総務会長には佐藤派の保利茂、政調会長には岸派の椎名悦三郎が決まった。

十八日には池田の首班指名がおこなわれ、ただちに組閣がはじまった。閣僚候補の原案はほとんど大平がつくり、池田

がそれを修正した。第一次池田内閣は、スピード組閣だった。

閣僚は、小坂善太郎外務、小島徹三法務、水田三喜男大蔵、荒木万寿夫文部、南條徳男農林、石井光次郎通産、南好雄運輸、鈴木善幸郵政、石田博英労働、橋本登美三郎建設、そして厚生には、これも大平の発案で、紅一点の中山マサが起用された。

大平正芳五十歳、それまで池田のかくし玉として、大臣はもちろん政務次官にもならなかった彼は、いよいよ政界の檣舞台になることになった。初当選以来、秘書として大平を支えてきた岩倉淳一（のち香川県会議員）は、警察庁から出向の今野耿介（のち年金福祉事業団監事）とともに、官房長官秘書官となった。